

思 い 出

第4回会長 小 沢 凱 夫

大正11年4月8日、日本郵船の箱根丸が朝もやけむる第8突堤に横づけとなった。佐多愛彦先生、小幡亀寿先生（大阪市民病院長）、勝呂誉博士や第1外科の医員小沢、山中、鄭君等は早速タラップをよじのぼり、上甲板にヘルテル先生ご夫妻を迎えた。当時新興の意気に燃えて居った佐多先生は、ビルロートやビーア先生にお願いして、ヘルテル先生を推されて、来日せられる破目になった。

ヘルテル先生はドイツのザクセンに生れ、フェルスター先生、ビーア先生について外科を修められた。何としてもザクセン生れである。ドイツ人でも時々聞きなおすこともある程で、訛の強いことであり、出迎えに行った連中でも *Guten Tag* と握手するだけで、あとは引込むということであった。神戸のお住いから10時に阪大へ顔を出される程度で、今日のオープンシステムの勤務であった。直接のご指導はなされなかった。それ故、教室員は自己でテーマを探し、自分で解決するというふうにやった。それでも相当有益な業績を挙げた。

ある日の回診に12、3歳の白田某女は私の患者であり先生に腸腰筋炎でありますと申し上げましたところ、先生はげげんな顔つきで、筋炎などないとお叱りになられた。この論争は二、三日続いた日本外科学会で、しばしば話題になり、宿題報告の問題としてとりあげられ、筋炎は外傷や過労の結果筋肉内に抵抗減弱部が作られて、これが筋炎の原因なりと説明せられて居った。私は大正10年頃から病理教室にはいり、村田先生が哺乳動物の脚気様疾患の宿題報告の準備を手伝わされた。現に岐阜の小阪先生が、1年に数百例を扱われた程常識的で、外科医が筋炎を知らない者はなかった筈だ。私のような若者でも知って居った。ヘルテル先生とのやりとりが果てしなく続く。痛烈な討論で怖れられている京大の鳥潟隆造先生だけは、私の学会の講演を絶讃して下さった。筋炎はビタミンの欠乏症を基盤とする筋の炎症である。あとからわかったことであるが、ドイツにはビタミン欠乏症はないゆえ脚気がない。戦後は脚気をみない。筋炎もない。

学会の討論はプロレスでもない。水泳競技でもない。俗にいう勝負を言ってはいけない。

私は尚、榊原先生と心臓外科に関して討論し、注目された出があるのは皆様ご承知の如くである。今でも各種の会合でお目にかかるが、常に和気あいあいである。君子は和して同ぜず。君子の交は淡水の如しとか、私はよき友を持ったものだ。

時は流れる。この頃の学会を見ていると腑におちない。学会は申すまでもなく、各自の作り上げた新知見を一般聴衆の前に開陳して、その批判を求める、たたき台であるべきだ。物見遊山ではない。

今日をもって過去をふり返ってみると、世の変動の激しいことに驚嘆するほかはない。私が、大阪に開かれるという因縁から学会を引きうけたが、敗戦の混乱時代で、ご出席の方は多かったが、汽車の切符を入手することに困難し、各自の服装もみすぼらしく、兵隊靴に軍服姿。あちこちで戦死した人の噂ばなし。せめてご来会の方々にご馳走をといっても品不足。小さな鯛を買い出すために、大阪中央市場に何度足を運んだことか。

今私は84歳を迎えたが、学会に興味を失って来た。医師のモラルの高揚を旗印として、学会に

貢献したいとあせってはいるが、皆様ついてくれない。研究テーマは只今鞭打ち症の治療にとり組んで居る。交通戦争熾烈の中でこの問題にとり組むことは、吾々に課せられた重要なテーマである。“自動車追突で肩が痛みます” “ウンそれは鞭打ち症だ。この薬をのみなさい。” 自動車事故即鞭打ち症というお考えの方もあるらしい。その他医師のモラルの低下は日本だけではないらしい。世界大戦の落し子だ。私はこの問題で世論に反省を求めたい。

暴言多謝

(大阪大学名誉教授)
